

## 2014 年度 研究所・センター事業報告書

研究所・センター名	国際言語文化研究所
研究所・センター長名	高橋 秀寿

### I. 研究成果の概要

本欄には、研究所・センターの実施した研究の成果について、その具体的内容、意義、重要性等を、研究所総合計画(5 ヵ年)および 2014 年度重点プロジェクト申請調書に記載した内容に照らし、項目立てなどをおこなうできるだけわかりやすく記述してください。

2014 年度の国際言語文化研究所(以下、「言文研」と略す)では、①連続講座、②紀要発行、③研究所重点研究プログラム、④萌芽的プロジェクト研究およびそのほかのプロジェクト研究、⑤出版助成、⑥図書収集の 6 点を基軸として、2015 年度末までの「総合計画」に沿った活動を行い、下記の通りの成果を挙げた。

- ① **連続講座**は 2014 年 10 月の毎週金曜日 17 時 30 分から創思館カンファレンスルームと末川記念会館第三会議室で「西川長夫——業績とその批判的検討」をテーマに公開研究ワークショップを5回にわたって開催した。西川氏の業績が文学、国民国家論、植民地主義論、大学論などの観点から議論され、非常に多くの参加者が議論に加わった。これらの記録に基づいた成果は、報告者およびコメンテーターらが執筆する論文として、2015 年度第 27 巻 1 号『立命館国際言語文化研究』に掲載される。
- ② **研究所紀要**『立命館言語文化研究』に関しては、年内に予定どおり第 26 巻の第 1 号から第4号を、テーマごとの特集論文(研究所の企画やさまざまなプロジェクトの成果報告など)と投稿論文(査読付き)からなる研究ジャーナルとして発行した。
- ③ **研究所重点研究プログラム**
  - 1) 環カリブ地域における言語横断的な文化／文学の研究
  - 2) バイリンガルの脳言語イメージング研究
  - 3) カタストロフィと正義
  - 4) メディアと日系人の生活研究会
  - 5) デジタル時代のヴァナキュラー文化： 移動するヴォイス
  - 6) ジェンダー研究会
  - 7) 風景のイメージとその人類学的諸相

各プロジェクトとも研究所の総合計画と調和することを意識的に追求しながら、それぞれの年度目標を十分に達成し、言文研の今後の活動基盤となりうる実績を上げた。とくに 3)の「カタストロフィと正義」は国際カンファレンス「忍び寄るカタストロフィーその多様性と遍在性—」を 3 日間にわたって開催、海外からの研究者や学内外の多彩なメンバー・招聘者をはじめ、参加者もまじえて活発な議論がなされた。5)の「デジタル時代のヴァナキュラー文化」も「生きている伝統：トラベラーズのスコッティッシュ・バラッド(物語歌)」の講演会を開催し、6)の「ジェンダー研究会」では「生存学研究センター」との共催で、国際シンポジウム「敗戦／引揚げ／性暴力 『竹林はるか遠く』ブームを問い直す」を開催した。7)の「風景のイメージとその人類学的諸相」はシンポジウム「ノマドとしてのイメージ—ハンス・ベルティンク『イメージ人類学』再考」を開催して、盛んな議論を展開した。どのプロジェクトも若手の育成にも積極的で、若手研究者に研究発表や企画の運営など、活躍の場を与えた。したがって、今年度以降への継続によって研究はさらに深化していき、立命館の人文・社会科学研究の高度化に着実に貢献できるものと総括できる。
- ④ **萌芽的プロジェクト**は、6つの研究課題によって構成された。いずれもがプロジェクトの目的を十分かつ適正に達成するものとなった。とくに専門研究員や院生など、若手研究者が萌芽プロジェクトに積極的にかかわったことは評価できる。とくに「アフリカの社会と笑い研究会」(代表:岩田拓夫)は国際関係研究科との共催で海外から研究者を招聘して、研究会を催している。そのほかの研究プロジェクトにおいても、盛んに研究会活動が展開された。また、これらのプロジェクト研究を基盤にして研究所企画も多く開催され、とくに「クィア理論と日本文学—欲望としてのクィア・リーディング」や「日韓の境界を越えて～帝国日本への対し方～」の企画では非常に多くの参加者を得て、メディアでも注目された。これらの活動を通して、言文研を研究の場とするプロジェクトの、活発な展開を社会的に明確に示すことができたといえる。
- ⑤ **出版助成**については、2014 年度には応募がなかった。
- ⑥ **図書収集**に関しては、従来の蓄積(移民・比較文学・カリブ地域関係)に加えて、研究所重点研究プログラムにもとづく新たなニーズにしたがって収集が進みつつある。

## II. 拠点構成員の一覧

本欄には、2015年3月31日時点で各拠点にて所属が確認されている本学教員や若手研究者・非常勤講師・客員協力研究員等の構成員を全て記載してください。

※若手研究者とは、立命館大学に在籍する以下の職位の者と定義します。

①専門研究員・研究員、②補助研究員・RA、③学振特別研究員(PD・RPD)、④博士後期課程院生・一貫制博士課程3回生以上に在籍する院生

役割	氏名	所属	職位
研究所長・センター長	高橋秀寿	文学部	教授
運営委員	井上 彰	先端総合学術研究科	准教授
	ウェルズ恵子	文学部	教授
	小川真和子	文学部	准教授
	河原典史	文学部	教授
	佐藤 涉	法学部	准教授
	田浦秀幸	言語教育情報研究科	教授
	中川成美	文学部	教授
	仲間裕子	産業社会学部	教授
	西林孝浩	文学部	准教授
	西 成彦	先端総合学術研究科	教授
	平田 裕	言語教育情報研究科	教授
	FOX Charles	文学部	教授
	南川文里	国際関係学部	准教授
学内教員 (専任教員、研究系教員等)	JACKSON Lachlan	法学部	准教授
	千川哲生	文学部	准教授
	崎山政毅	文学部	教授
	土肥秀行	文学部	准教授
	津熊良政	言語教育情報研究科	教授
	Paul Dumouchel	先端総合学術研究科	教授
	米山 裕	文学部	教授
	宮下敬志	文学部	助教
	加藤昌弘	文学部	助教
	坂本利子	産業社会学部	教授
	松本克美	法務研究科	教授
	二宮周平	法学部	教授
	上野千鶴子	先端総合学術研究科	特別招聘教授
	丸山里美	産業社会学部	准教授
	飯田未希	政策科学部	准教授
竹中悠美	先端総合学術研究科	准教授	

学内の若手研究者	専門研究員・研究員	田中壮泰	衣笠総合研究機構	専門研究員
		角崎洋平	衣笠総合研究機構	専門研究員
		佐藤 量	R-GIRO	専門研究員
		久保忠行	衣笠総合研究機構	専門研究員
	補助研究員・リサーチアシスタント			
	学振特別研究員 (PD・RPD)	原 佑介	日本学術振興会	特別研究員
		エマヌエラ・コスタ	日本学術振興会	特別研究員 (PD)
		山本真紗子	日本学術振興会	特別研究員 (PD)
	博士後期課程院生・一貫制博士課程 3 回生以上 在籍院生	大野藍梨	先端総合学術研究科	一貫制6回生
		安孝淑	先端総合学術研究科	一貫制5回生
		安田智博	先端総合学術研究科	一貫制5回生
		山口真紀	先端総合学術研究科	一貫制7回生
		飯塚隆藤	文学研究科	博士後期課程 5 回生
		李定恩	国際関係研究科	博士後期課程1回生
古谷やす子		文学研究科	後期課程1回生	
泉谷瞬		文学研究科	博士後期課程 4 回生	
その他の学内者 (非常勤講師・研究生・研修生等・ 博士前期課程院生等)	波多野美香	言語教育情報研究科	修士課程3回生	
	張 旋	言語教育情報研究科	修士課程 2 回生	
	喬 婷	言語教育情報研究科	修士課程1回生	
	木下昭	文学部	非常勤講師	
	海寶康臣	言語教育センター	嘱託講師	
	山崎遼	文学研究科	前期課程2回生	
	那須綾乃	文学研究科	前期課程1回生	
	二村洋輔	文学研究科	研修生	
	池内靖子	産業社会学部	非常勤講師	
	堀江有里	国際関係研究科	非常勤講師	
	金友子	言語教育センター	嘱託講師	
	金恵玉	経済学部ほか	非常勤講師	
	三木順子	産業社会学部/京都繊維工芸大学 工芸科学研究科	非常勤講師/准教授	
	住田翔子	産業社会学部	非常勤講師	
客員協力研究員	佐久間 寛	東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所	研究機関研究員	
	山辺 弦	日本学術振興会	特別研究員(PD)	
	Adam Broinowski	ANU College of Asia and the Pacific	Post-Doctoral Fellow	
	宮下和子	鹿屋体育大学/ 放送大学	名誉教授/ 教授	
	西山淳子	和歌山大学	准教授	

	姫岡とし子	東京大学・人文社会系研究科	教授
	梁仁實	岩手大学	准教授
その他の学外者 (他大学教員・若手研究者等)	久野量一	東京外国語大学	准教授
	鈴木慎一郎	関西学院大学	教授
	杉浦清文	中京大学	専任講師
	中村隆之	大東文化大学	専任講師
	大辻 都	京都造形芸術大学	准教授
	寺尾智史	東京大学他	非常勤講師
	くぼたのぞみ		翻訳家
	東 琢磨		音楽評論家
	宇佐美誠	京都大学	教授
	大澤真幸	麗澤大学	客員教授
	後藤玲子	一橋大学	教授
	中山竜一	大阪大学	教授
	Mark Anspach	Imitatio Foundation	Research Fellow
	小門穂	大阪大学	特任助教
	近藤 宏	国立民族学博物館	外来研究員
	牛革平	愛知大学	国際中国学究センター ICCS 研究員
	小西真理子	東京大学	学振PD
	飯田耕二郎	大阪商業大学	教授
	日比嘉高	名古屋大学	准教授
	松盛美紀子	関西外国語大学	非常勤講師
	半澤典子	京都女子大学	博士後期課程 3 回生
	辰巳 遼	京都外国語大学	博士後期課程 4 回生
	関口英里	同志社女子大学	教授
	湊 圭史	同志社女子大学	専任講師
	岡野八代	同志社大学・グローバル・スタディーズ研究科	教授
	秋林こずえ	同志社大学・グローバル・スタディーズ研究科	教授
	山下英愛	文教大学文学部	教授
仲間 絢	学振特別研究員(DC1)・ミュンヘン中央美術史研究所/京都大学大学院人間・環境学研究科	客員研究員/博士後期課程	
研究所・センター構成員 計 94 名 (うち学内の若手研究者 計 15 名)			

### Ⅲ. 研究業績

本欄には、「Ⅱ. 拠点構成員の一覧」に記載した研究者の研究業績のうち、拠点に関わる研究業績を全て記載してください。(2015年3月31日時点)

1. 著書							
No.	氏名	著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	その他編者・著者名	担当頁数
1	西成彦	バイリンガルな夢と憂鬱	単著	2014. 11	人文書院		pp. 1-277
2	大辻都	芸術大学でまなぶ文芸創作入門	単著	2015. 03	ブイツーソリューション		pp. 1-198
3	寺尾智史	欧州周縁の言語マイノリティと東アジア—言語多様性の継承は可能か	単著	2014. 07	彩流社		pp. 1-267, i-xv
4	田浦秀幸	バイリンガリズム入門	単著	2014年7月	大修館書店	山本雅代編	5, 10, 12, 15章
5	Paul Dumouchel	The Ambivalence of Scarcity and Other Essays	単著	2014年10月	Michigan State University Press		388PP.
6	井上彰	政治理論とは何か	共編著	2014年10月	風行社	田村哲樹(共編者)	PP. 1-45
7	井上彰	現代の経済思想	共著	2014年10月	勁草書房	橋本努(編者)	PP. 173-201
8	湊圭史(訳)	クリストス・チョルカス著『スラップ(オーストラリア現代文学傑作選)』	単独/翻訳	2014年12月	現代企画室		pp. 1-525
9	松本克美	『法学ことはじめ』	共著	2015年3月	法律文化社	生田勝義・大平祐一・倉田玲・河野恵一・佐藤藤二・徳川信治	PP. 15~74
10	仲間裕子	ハンス・ベルティンク『イメージ人類学』	単著(翻訳)	2014年11月	平凡社		pp. 1-375

2. 論文								
No.	氏名	著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行年月	発行所、発表雑誌、巻・号数	その他編者・著者名	担当頁数	査読有無
1	田中壮泰	二言語詩人フォーゲル	単著	2014. 05	『スラヴ学論集』17号		pp. 216-241	有
2	原佑介	戦後文学の「夜の声」——朝鮮戦争と戦後日本の誕生	単著	2014. 10	『戦後史再考』西川長夫他編		pp. 130-144	無
3	久野量一	『低開発の記憶』にみる植民地知識人の戦略——カリブ文学論その1	単著	2015. 03	『総合文化研究』第18号		pp. 54-65	無
4	中村隆之	植民地主義とレイシズム——フランツ・ファノン『レイシズムと文化』を中心に	単著	2014. 06	『年報カルチュラル・スタディーズ』2号、カルチュラル・スタディーズ学会		pp. 9-34	無
5	中村隆之	グリッサンの〈全-世界〉(3) 歴史物語の森へ	単著	2014. 09	『思想』岩波書店、1085号		pp. 64-89	無
6	中村隆之	グリッサンの〈全-世界〉(4) 消滅したアコマ、潜勢するリズム	単著	2015. 02	『思想』岩波書店、1090号		pp. 127-149	無
7	中村隆之	グリッサンの〈全-世界〉(5) カオスの海原へ	単著	2015. 04	『思想』岩波書店、1092号		pp. 107-138	無
8	中村隆之	「状況論[シチュアション]再考: ファノンとの批判的対話	単著	2015. 03	澤田直編『サルトル読本』法政大学出版局		pp. 236-249	無
9	寺尾智史	中南米における諸言語の規範化	単著	2014. 09	『内モンゴル大学シンポジウム「書記伝統の中の標準書記に関する歴史的東西比較研究」論文集』		pp. 290-300	無
10	田浦秀幸	日英バイリンガル園児のメタ言語発達段階解明研究: 日本語モノリンガル園児との比較パイロットスタディー	単著	2014年11月	立命館大学「言語科学研究 Working Papers」4		PP. 1-12	有

11	田浦秀幸	バイリンガル脳を覗く：帰国生と国際結婚家庭の子供達を対象に一日英バイリンガルの言語接触とバイリンガリティー	単著	2014年11月	「立命館言語文化研究」26巻2号		PP. 46-63	有
12	TAURA, Hideyuki	17-Year Longitudinal Narrative Development in a Non-Dominant Language of Two Japanese-English Bilingual Siblings	単著	2015年3月	「立命館言語文化研究」26巻4号		PP. 1-7	有
13	平田裕	日本語初級学習者の筆記テスト時と会話時の脳活動 —fNIRS データの相関分析試行—	単著	2015年3月	立命館大学「言語科学研究」5		pp. 7-32	有
14	Paul Dumouchel	Dépasser l' humain?	単著	2014年11月	la Croix		P. 13	無
15	Paul Dumouchel	Reciprocity: Nuclear Risk and Responsibility	単著	2015年3月	Ritsumeikan Studies in Language and Culture 26 (4)		PP. 129-142	無
16	井上彰	分析的政治哲学とロールズ『正義論』	単著	2014年5月	政治思想研究、第14号		PP. 6-32	無
17	井上彰	運の平等論とカタストロフィ	単著	2015年3月	立命館言語文化研究、第26巻4号		PP. 231-247	無
18	河原典史	「メディアと日系人の生活研究会」の報告にあたって	単著	2015年3月	立命館大学国際言語文化研究所、立命館言語文化研究26巻4号		PP. 25-26	無
19	山本剛朗	日本観研究—アメリカ人を例として—	単著	2015年3月	立命館大学国際言語文化研究所、立命館言語文化研究26巻4号		PP. 27-40	無
20	佐藤麻衣	『紐育新報』と邦人美術展覧会—角田柳作の The Japanese Culture Centre とのかかわり—	単著	2015年3月	立命館大学国際言語文化研究所、立命館言語文化研究26巻4号		PP. 41-54	無
21	和泉真澄	メディアとしての卒業アルバム—ヒラリー・日系アメリカ人収容所における高校生活の表彰分析—	単著	2015年3月	立命館大学国際言語文化研究所、立命館言語文化研究26巻4号		PP. 55-72	無
22	デイ多佳子	「リトルブラウンマン (little brown man)」をめぐる一考察—アメリカの包摂的視座から見た日本人の膚の色—	単著	2015年3月	立命館大学国際言語文化研究所、立命館言語文化研究26巻4号		PP. 73-86	無
23	半澤典子	ブラジル・ノロエステ地方における日本語新聞の果たした役割	単著	2015年3月	立命館大学国際言語文化研究所、立命館言語文化研究26巻4号		PP. 87-102	無
24	小林善帆	『女性満州』と戦時下の生け花	単著	2015年3月	立命館大学国際言語文化研究所、立命館言語文化研究26巻4号		PP. 87-102	無
25	ウェルズ恵子	「アメリカは歌う、陽気に、力強く—近代化の渦の中で」	単著	2014年9月	『Vintage Clothing: 古着屋さん』1037号		pp. 16-33	無
26	ウェルズ恵子	<執筆と編集>「日本とアメリカ、歌の架け橋：ステューブ・フォスター歌曲の受容と展開」	共著	2014年10月	『立命館言語文化研究』26巻1号	ディーン・L・ルート、湊圭史(訳)、ソンドラ・ウィーランド・ハウ、佐藤涉(訳)、宮下和子	pp. 29-105	無
27	佐藤涉	「オーストラリア文学に見る文化資源の商品化と消費」	単著	2015年1月	『立命館英米文学』24巻		pp. 1-18	無
28	加藤昌弘	“Uncovering Racism in Small Nations: Toward a Comparative Analysis of Scotland's Devolution and Catalonia's	単著	2014年7月	『立命館文学』638号		pp. 25-33	有

		Self-Determination”						
29	宮下和子	「スティーブン・フォスター再発見」	単著	2014年10月	『立命館言語文化研究』26巻1号		pp. 79-97	無
30	関口英里	「社会貢献と自己実現に向けた実践学習の取り組み」	単著	2014年12月	『レジャーレクリエーション研究』73号		pp. 10-15	無
31	松本克美	一部請求と時効の中断—裁判上の催告の時効中断効について	単著	2014年6月	立命館大学法学会, 立命館法学, 353号		PP. 27~66	無
32	松本克美	児童の起こした自転車事故と母親の監督義務者責任	単著	2014年7月	日本評論社, 私法判例リマックス, 49号		PP.50~53	無
33	松本克美	『過去の克服』と将来展望	単著	2014年11月	日本評論社, 改憲を問う 民主主義法学からの視座, (法律時報増刊)		PP.216 ~ 221	無
34	松本克美	民法724条後段の二〇年間の法的性質と民法改正の経過規定について	単著	2015年1月	日本民主法律家協会, 法と民主主義, 495号		PP.41~45	無
35	松本克美	民法724条後段の20年間の起算点と損害の発生—権利行使可能性に配慮した規範的損害額在化時説の展開	単著	2015年3月	立命館法学会, 立命館法学, 357・358号		PP.1809 ~ 1848	無
36	丸山里美	ホームレスと女性	単著	2014年6月	日本住宅会議, 住宅会議, 91号		PP.26~30	無
37	丸山里美	貧困女性の声を聞く	単著	2014年7月	社会主義協会, 社会主義, 625号		PP.83~90	無
38	丸山里美	書評に答えて	単著	2014年10月	社会学研究会, ソシオロジ, 59巻2号		PP.108 ~ 112	有
39	丸山里美	女性の貧困問題の構造	単著	2014年12月	労働政策研究・研修機構, Business Labor Trend, 53号			無
40	泉谷瞬	暴力からの脱出／他者への接近—津村記久子「地下鉄の叙事詩」論	単著	2014年9月	日本文学協会, 日本文学, 63巻9号		PP.47~58	有
41	泉谷瞬	「不幸」な結婚が意味するもの—鹿島田真希「冥土めぐり」論	単著	2015年3月	立命館大学生存学研究センター, 生存学, 8号		PP.251-262	有
42	Yuko Nakama	Nature and Landscape in Contemporary Representation — A Comparative View on Japanese and Western Art	単著	2014年12月	The Journal of Asian Arts & Aesthetics		pp.83-90	無
43	Junko Miki	Aesthetic Authenticity without Historical Genesis: On the Ceremonial System of Periodic Reconstruction at Ise Shrine	単著	2014年12月	The Journal of Asian Arts & Aesthetics		pp.75-82	無

3. 研究発表等					
No.	氏名	発表題名	発表年月	発表会議名、開催場所	その他発表者名
1	中村隆之	「西川長夫、(新)植民地主義論の思想家として」(西川長夫:業績とその批判的検討)	2014年10月	立命館大学国際言語文化研究所連続講座	
2	山辺弦	亡命の時空 —キューバ作家カルベール・カセイにおける英語／西語短編の比較	2015年1月	21世紀熊本大学文学部フォーラム「越境する世界文学」、第11回(熊本大学文学部)	
3	寺尾智史	ブラジルをめぐるマイノリティと東アジア—自著を南半球から折り返す	2014年12月	第9回日伯フォーラム(国立オリンピック記念少年総合センター)	
4	TAURA, Hideyuki	Supplementary use of fNIRS data in psycholinguistic research: A Japanese-English bilingual attrition case study	2014年10月	fNIRS 2014. Montreal, Quebec, Canada	
5	TAURA, Hideyuki	Longitudinal narrative development in a non-dominant language	2014年8月	The 17th World Congress of Applied Linguistics (AILA2014). Brisbane, Australia	
6	TAURA, Hideyuki	Critical period hypothesis tested by brain-imaging data from early Japanese-English bilinguals	2014年8月	The 17th World Congress of Applied Linguistics (AILA2014). Brisbane, Australia	

7	田浦秀幸	言語(LA 英語)保持・喪失研究における言語データ vs. fNIRS データ	2014年7月	第17回日本光脳機能イメージング学会, 2014.7.26. 東京・星陵会館	
8	田浦秀幸	Silent-reading vs. Being read-to: A brain-imaging study	2013年6月	2014年度JACET関西支部秋季大会, 2014.11.29. 龍谷大学大宮キャンパス	波多野良香
9	田浦秀幸	トライリンガルの言語スイッチ・コスト: 機能的近赤外分光法(fNIRS)を用いて	2014年5月	第1言語としてのバイリンガリズム研究会(BiL1)2014年度春期大会, 立教大学池袋キャンパス	張旋
10	平田裕	筆記テスト時と目標言語会話時の脳活動の近似性 - 日本語中上級学習者 fNIRS データの個人内検証 -	2014年9月	日本言語テスト学会 第18回全国研究大会	単独発表
11	平田裕	初級学習者の筆記テスト時、会話時の脳活動 - fNIRS データの個人内検証 -	2014年7月	2014年日本語教育国際研究大会 (シドニー)	単独発表
12	Paul Dumouchel	Dépasser l' humain ?	2014年11月	L' homme et les technosciences : le défi, 89e Semaine Sociale de France, Université Catholique de Lille	
13	Paul Dumouchel	Catastrophe and Time	2015年3月	International Conference: "Silent, Invisible, Slow Moving Catastrophes", Ritsumeikan University	
14	Akira Inoue	Rawlsian Contractualism and the Cognitively Disabled	2014年5月	International Conference: Social Contract Theory. Past, Present, and Future, University of Lisbon	
15	Akira Inoue	On Parfitian Prioritarianism and the Separateness of Persons	2014年8月	13th Conference of International Society for Utilitarian Studies, Yokohama National University	
16	Akira Inoue	On Institutional Luck Egalitarianism	2014年11月	The 12th Asia Pacific Conference, Ritsumeikan Center for Asia Pacific Studies	
17	Akira Inoue	Prioritarianism in a Catastrophic World	2015年3月	International Conference: "Silent, Invisible, Slow Moving Catastrophes", Ritsumeikan University, March 23, 2015.	
18	ウェルズ恵子	"Variations and Interpretations of Japanese Folk Religious Ballad, "Princess Anjyu and Prince Zushioh" (『山椒太夫』の変遷とその意味: 口承芸能からの出発)	2014年6月	国際バラッド学会第44回大会, ハンガリー・ペーチ	
19	ウェルズ恵子	フォークテイルの面白さ: 『赤ずきん』の真実を読む	2015年1月	文学研究科英語圏文化専修設立記念連続講演会第6回「流体としてのことば、文化、地域」, 立命館大学衣笠キャンパス	
20	佐藤渉	「オーストラリア文学の展開—オーセンティシティを中心に—」	2015年1月	関西日豪協会平成26年度「オーストラリア・デイ」記念講演会, リーガロイヤルホテル大阪	
21	海賓康臣	「文頭の And をめぐって」	2015年3月	ヴァナキュラー文化研究会, 衣笠キャンパス	
22	加藤昌弘	「もしもスコットランドが独立したら——1979年以降の国民文化とゲール語メディアをめぐる議論から考える」	2014年7月	日本カレドニア学会2014年度第2回研究会, キャンパスプラザ京都	
23	加藤昌弘	「多文化主義国家にケルト語の復興計画は必要なのか——現代スコットランドのゲール語メディア政策を事例として」	2014年10月	第34回日本ケルト学会研究大会, 宮城学院女子大学	
24	山崎遼	「バラッドに隠された、生きていくための教訓」	2014年10月	2014年度日本カレドニア学会大会, 拓殖大学文京キャンパス	
25	山崎遼	「イギリス伝承バラッドに隠された教訓」	2015年2月	第1回地域文化・政治研究大会, 於名古屋大学東山キャンパス	
26	宮下和子	「映画『大統領の執事の涙』に見る父と息子のコミュニケーション」	2014年10月	日本コミュニケーション学会九州支部第21回大会, ホルトホール大分	
27	関口英里	「地域文化の活性化と魅力再発見を目指した連携プロジェクトの可能性」	2014年12月	日本レジャー・レクリエーション学会(JSLRS)第44回大会, 立教大学	
28	関口英里	「伝統文化の再構築と新たな発展に向けて」	2014年9月	日本都市社会学会第32回大会, 専修大学	
29	湊圭史	"Multiculturalism and Multiple Points of View in Contemporary Australian Novels"	2014年7月	The 2014 International Conference of the Australian Studies Association of Japan at Sophia University, Tokyo	
30	湊圭史	『ダイヤモンド・ドッグ』再考—多文化主義見直しの時代に—	2014年11月	2015年度 オーストラリア・ニュージーランド文学会秋季大会, 立命館大学衣笠キャンパス	



31	松本克美	児童期の性的虐待被害をめぐる損害賠償請求訴訟と時の壁	2014年5月	法社会学会 2015 年度学術大会ミニシンポジウム「児童期の性的虐待被害の回復をめぐる法と現状」、大阪大学豊中キャンパス	
32	松本克美	児童期の性的虐待被害とその回復をめぐる法と心理	2014年10月	法と心理学会第14回大会、関西学院大学	
33	松本克美	コメント・不動産と製造物責任一欠陥住宅判例法理の展開をふまえて	2014年11月	日本消費者法学会第7回大会、東京経済大学	
34	松本克美	児童期の性的虐待被害からの回復と〈時の壁〉—釧路 PTSD 等訴訟を契機とした法解釈・立法論の課題	2015年1月	札幌法心理研究会、北海道大学・学術交流会館	
35	Satomi Maruyama	Invisible Feminized Poverty: Homeless Women in Japan'	2014年8月	Women's World Congress, University of Hyderabad	
36	飯田未希	近代美容業の発展と男性	2014年9月	立命館大学国際言語文化研究所ジェンダー研究会、立命館大学	
37	飯田未希	近代美容業の発展と理髪師たち	2014年10月	日本労働社会学会第26回大会、駒沢大学	
38	泉谷瞬	現代日本文学は「息子介護」をどのように描いているか？	2014年7月	立命館大学国際言語文化研究所ジェンダー研究会：立命館大学ジェンダーフォーラム「書評セッション 平山亮著『迫りくる「息子介護」の時代』」、立命館大学	
39	泉谷瞬	接触と流血の諸相——姫野カオルコ『受難』と映像表現の身体性	2015年1月	立命館大学国際言語文化研究所主催国際コンファレンス「クィア理論と日本文学—欲望としてのクィア・リーディング—」、立命館大学	
40	竹中悠美	1930年代アメリカの災害表象における文学的救済と写真的呵責	2015年2月21日	文芸学研究会第57回研究発表会	
41	Junko Miki	Picturing Ise	2014年9月	シンポジウム De la matérialité à l'immatérialité 開催場所：国立美術史研究所（パリ）	稲賀繁美、西田雅嗣、Nicolas Reveyron、Alain Schnapp
42	Shoko Sumida	Landscape Documentation: collecting 'personal landscapes' within communities	2014年9月	Japanese Association for Digital Humanities Annual Conference 2014, University of Tsukuba	Mariko Kaname Tsuyoshi Tamura
43	住田翔子	記憶、あるいは風景としての廃墟—1980年代以降の廃墟写真集を中心に	2014年9月	第30回民族芸術学会大会、国立民族学博物館	

4. 主催したシンポジウム・研究会等					
No.	発表会議名	開催場所	発表年月	来場者数	共催機関名
1	《英語・スペイン語・フランス語・オランダ語、さらにはクレオール系諸語の壁をまたいで》	衣笠キャンパス	2014年9月	25名	
2	大辻都『渡りの文学』を読む	衣笠キャンパス	2014年11月	15名	
3	Symposium: Biligualism as a first language in the Japanese context	Brisbane, Australia	2014年8月	約50名	AILAにおけるシンポジウム
4	第1回 国際正義共生研究会	衣笠キャンパス	2014年7月	10名	
5	11 <sup>th</sup> International Conference: Silent, Invisible, Slow Moving Catastrophes	衣笠キャンパス	2015年3月	40名	立命館大学大学院先端総合学術研究科、立命館大学生存学研究センター
6	ヴァナキュラー文化研究会	衣笠キャンパス	2014年9月	6名	
7	公開リーディング/講演会「クリストス・チョルカス『スラップ』: オーストラリア、多文化社会のゆくえ」	衣笠キャンパス	2015年1月	18名	オーストラリア・ニュージーランド文学会
8	公開講演会「生きている伝統—トラベラーズのスコティッシュ・バラッド(歌物語)」	衣笠キャンパス	2015年3月	26名	立命館大学大学院文学研究科英語圏文化専修
9	ヴァナキュラー文化研究会	衣笠キャンパス	2015年3月	10名	
10	立命館大学ジェンダーフォーラム「書評セッション 平山亮著『迫りくる「息子介護」の時代』	衣笠キャンパス	2014年7月	41名	
11	国際ワークショップ「敗戦/引揚げ/性暴力:『竹林はるか遠く』ブームを問い直す」	朱雀キャンパス	2014年7月		生存学研究センター
12	第3回ジェンダー研究会「近代美容業の発展と男性」	衣笠キャンパス	2014年9月	5名	

13	国際コンファレンス「クィア理論と日本文学-欲望としてのクィア・リーディング」	衣笠キャンパス	2015年1月		
14	シンポジウム：ノマドとしてのイメージ—ハンス・ベルティンク『イメージ人類学』再考	衣笠キャンパス	2015年3月	46名	

5. その他研究活動（報道発表や講演会等）					
No.	氏名	研究業績名	発表場所等	研究期間	
1	ウェルズ恵子	学外研究制度 「1920-30年代アメリカ文化に関する研究—文学と音楽文化を中心に」	オランダ, ハンガリー, ポーランド, オーストリア, イタリア, アメリカ,	2014年9月～2015年3月	
2	ウェルズ恵子	<共催・企画立案>連続講演会「流体としてのことば、文化、地域」全7回（主催：立命館大学大学院文学研究科英語圏文化専修）	立命館大学衣笠キャンパス	2014年9月～2015年3月	
3	湊圭史	<モデレーター>「オーストラリア現代文学傑作選」第3巻 『スラップ』（クリストス・チョルカス著）刊行記念会』	代官山・ヒルサイドバンケット	2014年1月	
4	松本克美	建築瑕疵訴訟の到達点と課題—住宅の安全確保と被害回復の観点から	欠陥住宅全国ネット第36回四日市大会, じばさん三重ホール	2014年5月	
5	松本克美	宅地被害の法的責任—自然力競合事案における不法行為責任	欠陥住宅被害全国連絡協議会第37回下関大会, 下関市・海峡メッセ国際会議	2014年11月	
6	仲間裕子	日本美術の美意識	台北、国立故宮博物院	2014年9月24日	
7	竹中悠美	第12回 評論を書くことを考えてみる会<写真を評論する>	GALLERY Ami-Kanoko（大阪）	2014年10月4日	

6. 受賞学術賞					
No.	氏名	授与機関名	受賞名	タイトル	受賞年月
1	丸山里美	日本都市社会学会	第5回日本都市社会学会若手奨励賞	女性ホームレスとして生きる貧困と排除の社会学	2014年9月
2	丸山里美	現代風俗研究会	第24回橋本峰雄賞	女性ホームレスとして生きる貧困と排除の社会学	2014年12月

7. 科学研究費助成事業						
No.	氏名	研究課題	研究種目	開始年月	終了年月	役割
1	西成彦	比較植民地文学研究の基盤整備	基盤研究(C)	2012年4月	2015年3月	代表
2	久野量一	宗主国の交代と植民地—20世紀スペイン語圏カリブ地域文学における共同体意識の研究	基盤研究(C)	2014年4月	2018年3月	代表
3	田浦秀幸	表象・アルファベットバイリンガルの脳活動様態のfNIRS研究	基盤研究(B)	2013年4月	2017年3月	代表
4	田浦秀幸	日本人英語学習の英語脳内メカニズム解明縦断・横断研究	挑戦的萌芽研究	2013年4月	2016年3月	代表
5	田浦秀幸	中国の大学での英語教員養成課程の現地縦断調査—日本への提言	基盤研究(C)	2010年4月	2014年3月	分担
6	田浦秀幸	早期日英バイリンガルの14年間の縦断研究のナラティブ分析研究	基盤研究(C)	2011年4月	2014年3月	分担
7	ウェルズ恵子	アメリカにおける都市移民の口承文化:1880-1930年代の南欧東欧移民を中心に	基盤研究(C)	2014年4月	2018年3月	代表
8	西山淳子	英語の時の副詞と現在完了形の意味と解釈と情報構造の関係	基盤研究(C)	2014年4月	2017年3月	代表
9	松本克美	児童期の性的虐待被害者のレジリエンスを支援する時効法改革の提言	新学術領域	2014年4月	2016年3月	代表
10	丸山里美	女性の貧困の実証研究に基づく女性福祉の構想—セクシュアリティ概念の再定義を通じて	若手(B)	2014年4月	2017年3月	代表
11	二宮周平	家事事件当事者の合意による解決と家事調停・メディエーション機能の検証	基盤研究(B)	2014年4月	2017年3月	代表
12	秋林こずえ	「沖縄フェミニズム」と平和構築—軍事占領と性暴力	基盤研究(C)	2014年4月	2017年3月	代表
13	岡野八代	身体フェミニズム理論の構築—性暴力批判と女性の具体的なエンパワメントに向けて	挑戦的萌芽研究	2014年4月	2017年3月	代表
14	姫岡とし子	近代ドイツのナショナリズムと女性の政治化—植民地問題を中心として	基盤研究(C)	2014年4月	2017年3月	代表

15	梁仁實	韓国の「文化」テキストの越境とコリアン・ディアスポラにおける変容	基盤研究(C)	2014年4月	2017年3月	代表
16	竹中悠美	ニューディール政策のFSA写真プロジェクトにおける〈貧困〉と〈被災〉の表象	基盤研究(C)	2013年4月	2016年3月	代表
17	仲間絢	ドイツ・ゴシックにおける聖母表象と女性性	特別研究員奨励金	2012年4月	2015年3月	代表

#### 8. 競争的資金等(科研費を除く)

No.	氏名	研究課題	資金制度・研究費名	採択年月	終了年月	役割
1	田浦秀幸	第1言語としての日英バイリンガリズム研究成果発信	2014年度研究の国際化推進プログラム	2014年4月	2015年3月	代表
2	田浦秀幸	バイリンガル縦断ナラティブデータの言語分析	2014年度国際言語文化研究所萌芽的プロジェクト研究助成プログラム	2014年4月	2015年3月	代表
3	田浦秀幸	バイリンガルの言語脳イメージング兼研究	2014年度国際言語文化研究所 研究所重点プログラム	2014年4月	2015年3月	代表
4	河原典史	カナダにおける日本庭園の保全と伝承ーバンクーバー日系ガーディナーズ協会 55周年を迎えてー	2014年度研究の国際化推進プログラム	2014年4月	2015年3月	代表

#### 9. 知的財産権

No.	氏名	名称	出願人区分	発明人区分	出願番号	公開番号	登録(特許)番号	国
1								

以上